

限定空間における対人距離の知覚とその影響要因に関する研究：対人場面を想定した評価実験を通して

松本，輝紀

<https://doi.org/10.15017/459171>

出版情報：Kyushu University, 2005, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

第4章 結論

4.1 総括

4.1.1 成果の整理

人間が建築空間の中で他者と居合わせる場面において、常に自身の心理・生理的な快適性を確保するために対人距離を保とうとしている段階があると定義すると、建築空間の大きさや他者と居合わせる場合の姿勢、対人距離、空間の奥行きなどは、相互に寄与していると考えられる。本論文では、この仮説をもとに、一般的な住宅居室を想定した限定空間で、他者と居合わせる場合に焦点をあて、評価実験を通して対人距離の知覚とその影響要因について明らかにすることを目的とし、得られた結果から対人距離の知覚についてパーソナルスペースをはじめとする領域の概念との関係を整理することを意図している。本研究では三つの実験を通して上記の仮説を検証した。

第一の実験(第2章実験1)では、住宅居室を想定した実大の実験空間において、居心地・距離感・位置関係の評価項目を用いて、空間を体験する姿勢(立位・座位)の違いと空間の奥行きとの関係について、それらの影響要因について明らかにすることを目的とした。

実験から、座位の場合は立位の場合よりも他者との距離感やその際の居心地について寛容であること、6-12畳の居室程度の規模の空間では、対人場面において空間の規模そのものや立位・座位の姿勢の違いが居心地や距離感に影響していることがわかった。このことは座位よりも立位のパーソナルスペースの方が大きいことを示唆しており、非限定空間で実験を行った西出・高橋らの姿勢とパーソナルスペースについての実験結果の一部(同姿勢どうしの場合「しばらくはこのままでよい」領域の大きさは、座位<立位<椅子座位の順で各姿勢による違いがある)と同じ傾向を示した。

第二の実験(第3章実験2)では、限定空間での対人場面を想定し、対人距離の知覚精度について確認しておく必要性から、設定した基準の位置での対人距離(標準刺激)に対し、指示した位置関係における対人距離(比較刺激)を「近い／同じ／遠い」で予測させ、その精度について確認することを目的とした。実験から以下の二点が明らかとなった。

- ・限定された空間において、対人距離を10cm前後の範囲で「近い・同じ・遠い」といった距離の違いを判別できる。
- ・「ここ」「そこ」「あそこ」といった指示に用いた言葉の違いによる心理的な距離の拡がりを段階的に把握することが可能である。

第三の実験(第3章実験3)では、限定空間における対人場面において、対面する他者(以下、本実験では相手と同義)および自己の手の届く距離を予測させ、その傾向を把握することを目的とした。

実験空間の設定は第二の実験と統一し、被験者には実験空間中央に設置したポールに対して「届く／届かない」の評価を、①自分が手だけを伸ばして、②自分が一步踏み出して、③相手が手だけを伸ばして、④相手が一步踏み出

して、の4項目について評価させた。同時にさまざまな位置関係におけるポール・相手・対抗壁面のそれぞれの位置を「ここ／そこ／あそこ」という指示語でも回答させた。

その結果、以下の四点が明らかとなった。

- ・対人場面において他者および自己の届く距離を予測する場合、自分の届く距離と比較して、他者の届く距離を過小評価する傾向にある。今回の実験では、約16%過小評価していた。
- ・対人場面において、対人距離そのものは10cm単位の精度で「近い」「遠い」といった判断ができる。今回用いたような規模の限定空間では、対人場面における対人距離が10cm違うことで、他者との微妙な距離感を感じとっているものと考えられ、それが相互の意思表示として機能しうる場合も考えられる。
- ・「ここ」「そこ」「あそこ」といった言葉によって、限定空間における自己と他者の位置関係を、心理的な意味の違いとして把握することができる
- ・非限定空間に対し、限定空間では空間の規模に制限があるため常に他者と不快でない距離を保てるとは限らない。しかし、我々はそういう状況下にあっても、他者との距離を調節し、体の向きや姿勢を変えることで心理的に不快な状況を自らの努力で回避しようとしている。

以上の三つの実験結果から、限定空間での対人場面における対人距離の知覚とその影響要因が明らかになった。

これらを踏まえ、それぞれの実験結果とパーソナルスペースを中心とした領域の概念の関係を本研究の総括として整理した(第4章)。

- ・座位の場合は立位の場合よりも他者との距離感やその際の居心地について寛容である傾向が示され(第2章)、このことは座位よりも立位の場合のパーソナルスペースが大きいことを裏付ける結果となった。
- ・他者の接近を可能にする身体的な状態(姿勢)が、対人距離を知覚する場合や居心地・距離感の判断において影響要因となりうること(第2章:第一の実験)は、第三の実験(第3章:第三の実験)での一歩踏み出す場合の届く範囲の予測との関連からも明らかになった。
- ・6-12畳の居室規模の空間では、空間の規模(特に奥行き)や立位・座位の姿勢の違いが居心地や距離感に影響していることから(第2章:第一の実験)、非限定空間で実験を行った西出・高橋ら既往研究と視点・手法を共有しながらも、結果として空間が限定されることが対人距離を知覚する際の影響要因となりうることを示した。
- ・対人距離を10cm前後の範囲で「近い・同じ・遠い」の判別できることを確認したうえで(第3章:第二の実験)、対人場面で他者および自己の届く距離を予測する場合、自分の届く距離と比較して、他者の届く距離を過小評価する傾向にあること(本研究では約16%過小評価)が結果として得られたことから(第3章:第三の実験)、第2章:第一の実験との関連からも、快適な対人距離の確保が物理的に不可能な場合は、心理的に自身が不快でない状況を確保しようとする傾向があることが考えられる。

4.1.2 目的および仮説に対する回答

【第2章：実験1】

- (1) 立位と座位の姿勢の違いが評価に影響し、座位よりも立位の場合のpersonal spaceの方が大きくなる傾向がある。
- (2) 住宅の居室を想定した6-12畳の4つの実験空間において、空間の奥行きの増加とともにパーソナルスペースの拡がりも拡大する。特に6畳と8畳の間にはその差が顕著に現れる。

【第3章：実験2／実験3】

- (1) 自分および相手の届く距離を予測する場合、自分が手だけを伸ばして届く距離よりも、相手が手だけを伸ばして届く距離を過小評価する傾向にある。今回の実験結果では約8～16%過小評価していた。したがって、互いのパーソナルスペースを知覚する段階で、その大きさに対する認識の違いが、一方のみを不快にする原因になっていることも十分考えられる。
- (2) 相手の手だけを伸ばして届く距離を過小評価することは、パーソナルスペースという相手の排他域を過小評価することであると考えられる。この過小評価する傾向により、相手との接近を心理的に寛容にしていると考えることもできる。

4.2 今後の課題

4.2.1 研究手法について

領域研究の手法としては、それぞれの対象に適したアプローチの仕方があると思うが、研究のスタンスとして、現実に生起している事象をエピソードとして記録したり、記述したりすることだけにとどまらず、その文脈的な背景にある概念の本質に迫るような視点が必要であると考えている。

4.2.2 継続すべき研究課題と今後の論点

本研究は、限定空間における対人知覚と領域形成に関する基礎的な実験研究である。実験そのものの設定も対人場面のある一場面をシンプルに再現するに留まっている。そのため、本論文での結果や考察はこの範囲において有効なものである。

今後は、領域研究において星の数ほどあるファクターの扱いを全体的な概念との関連から位置づけていくような視点やアプローチが必要になってくると

を考えている。さらには、フィールドでの豊かなエピソードを社会心理学やグループダイナミクスの視点と融合する形での研究のあり方が望まれる。

テリトリーとパーソナルスペースの関係

テリトリーとパーソナルスペースに関するそれぞれの概念的な特徴は、すでに前述したとおりであるが、ここでいま一度本論文における「領域」との関係からテリトリーとパーソナルスペースの概念を構造化してみたい。本論文における「領域」とは、視覚的に捉えることのできる物理的な空間の拡がりのことではなく、「心理的な空間の拡がり」のことである。つまり、パーソナルスペースにおける人間自身の身体や、テリトリーにおいて境界を表示するような対象物により、物理的な空間の拡がりが存在しているわけであるが、それらは心理的な空間の拡がりを捉える表象にしか過ぎない。よって、自分自身を取り巻く周辺環境には、心理的に異なる質の空間が階層構造として存在し、それを捉える作業の過程として領域の概念が存在すると考えた。

そもそも、パーソナルスペースはポータブル・テリトリーと呼ばれる場合もあることから、本質的にはテリトリーと同じ概念であると著者は考えている。図 4.1 に示しているように、概念としてポータブル／アン・ポータブルに関する軸を横軸に、身体／場所との関連性に関する軸を縦軸として配置すると、テリトリーの概念はアン・ポータブルで場所との関連性が強い部分（概念図中・左下）に位置するのに対し、パーソナルスペースの概念は、ポータブルで身体との関連性が強い部分（概念図中・右上）に位置づけることができる。よって、例えば「図書館の閲覧机にまずバッグを置いて席を確保した

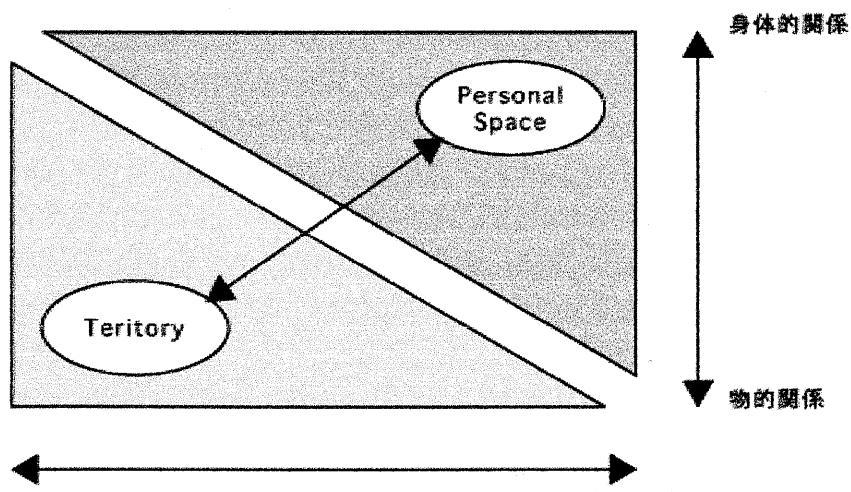


図 4.1 テリトリー、パーソナルスペースおよび領域の概念図

後に、近くの書架に本を探しに行く。その間バッグを置いている席は一時的に占有され、よほど混雑していたり長時間席を空けない限りは主人不在のまま席は確保される。」というような、公共性の高い空間における一時的に占有されるテリトリーともパーソナルスペースともいいがたい概念的な状態を、概念図の中央に位置づけることができる。

領域研究における概念の扱い

環境心理研究が盛んになり始めた1960～1970年代にかけて、本研究でいう領域研究の分野において多くの研究者がそれぞれの視点から多くの概念を提唱してきた。しかし、概念の根源は、対人場面における行動において人間が存在し生きていく上での大前提であるできる限り「不快ない状況を避けたい」あるいは「できる限り快適な状況に身をおきたい」という、欲求に答えるところに端を発しているように思える。そう考えると、領域に関する個々の概念を、領域形成という切り口から総合的に概念として構造化しようとする試みが今後期待され、概念の本質を捉えることで新たな視点を獲得することができるものと考える。